



# KAJIMAROAD Recruiting

きっと、未来に続く道

 鹿島道路

社名 鹿島道路株式会社 KAJIMAROAD CO.,LTD.  
本店所在地 東京都文京区後楽1-7-27 TEL 03-5802-8001  
資本金 40億円

いかがでしたか。  
鹿島道路だからこそ届けられる価値、  
そしてそこにある成長とやりがいの一端を、  
少し感じられたのではないのでしょうか。

もちろん、実際の仕事は、  
ここには書ききれない苦労や達成感の連続。  
たくさんの出会いや笑顔に溢れています。

あなたもぜひ、鹿島道路でしか経験できない、  
現場と物語に携わってみませんか。

「この場所で、自分なりの結果を築きたい」  
そんなあなたの志を、私たちは待っています。

情報盛りだくさん！  
採用サイトはこちら！



# INDEX

PAGE 2-3 MESSAGE・INDEX

PAGE 4-7 KAJIMAROAD STORY 01 【製品編】 栗原 夏樹

PAGE 8-11 KAJIMAROAD STORY 02 【土木編】 為口 直輝

PAGE 12-15 KAJIMAROAD STORY 03 【建築編】 杉本 康平

PAGE 16-19 KAJIMAROAD STORY 04 【機械編】 伊藤 圭祐

# MESSAGE

鹿島道路で働く、たくさんの社員。

その誰もが、「新しい価値創造への挑戦」

そして「人と地球の豊かで快適な環境づくり」

という大きな目標へ向かって、日々努力を重ねています。

これから紹介するのは、

そんな社員を代表する4名の物語。

時には大きなプロジェクトへ向かって、

時には目の前の現場へ向かって、

全力で邁進する挑戦者の姿です。

鹿島道路から始まる「未来へ続く道」を創る、

彼ら・彼女らの姿をご覧ください。



無我夢中で  
駆け抜けてきた日々が、  
機械のプロフェッショナル  
としての礎に。

栗橋合材製造所・機械  
2021年入社

栗原 夏樹 Natsuki Kurihara

### SESSION-01 重機を運ぶ、 父の仕事姿に憧れて

この仕事に興味を抱いたきっかけは、幼い頃から見ていた父の仕事です。舗装業界に勤めてい

た父が、回送用のトラックで建設機械を運んでいたことから、アスファルトフィニッシャーなどの重機を目にする機会が多くなりました。その時の「こんな大きな重機を乗りこなせたらカッコいいだろうな」という想いが、

この業界を就職先として選んだ一番の理由です。就職後は、関連企業で一連の業務を学んだ後、縁あって鹿島道路へ入社しました。前職の時から現在まで、私は重機オペレーター・プラントオペレーターとしてアスファルト混

合物の製造に携わっています。アスファルト混合物とは、砂・碎石・石粉・そしてアスファルトを配合した材料のことで、合材とも呼ばれます。このアスファルト混合物をつくるために、重機の操縦もプラントの操作もどちらも行っていきます。具体的にはまず、重機で混合物の材料となる石や砂をすくい、ホッパーと呼ばれる設備に入れていきます。次に、プラントの操作に移り、ホッパーから石や砂をドライヤと呼ばれる装置に移し、乾燥させて水分を飛ばすんです。そして、材料が温かい状態のままふるいにかけて、ホット瓶と呼ばれる瓶に溜めていきます。最後に、それらに石粉とアスファルトを加えてミキシングすると、アスファルト混合物の完成です。こうしてできた混合物は、道路の舗装などに使用されています。



### SESSION-02 良いアスファルト 混合物は、 「適切な温度」から

施工会社様からいただける「今日の合材良かったよ！」という言葉は、この仕事のやりがいにつながっています。ここで言う「良い合材」とは、「規定通りの温度」であることを指します。アスファルト混合物には165度や170度といった規定の温度があり、それに合わせる必要があるんですね。この温度から高すぎても低すぎても品質は下がってしまい、施工時に上手く固まらなかったり、ボソボソして使いものにならなくなってしまったりします。また、注意しなければならぬのは、夏や冬の外気温、その日の天気や風の強さ、さらには現場までの距離です。これらの情報をもとに、どれくらいの温度で出荷すれば、混合物が「規定通りの温度」で利用できるのかを計算し、製造する。その結果、施工会社様より良い評価をいただけると大きな達成感があります。



一方、重機で作業をしている瞬間は本当に楽しいですね。他の業者の方からも、「こんな大きな重機乗れるの？」「カッコいいね！」なんて言っていただけだと嬉しいですし、自分を誇らしく思います。こうした様々なお客様や協力会社様とのコミュニケーションも、この仕事の魅力の一つだと感じています。

### SESSION-03 無我夢中で、 仕事に取り組む日々

この仕事の大変さは、何と云っても体力勝負なところでしょうか。そのため、どうしても男性の割合が多く、全国を見ても女性が少ないと思います。加えて、汚れる時は本当に汚れるんですよ。特に、アスファルト混合物をつくる途中で発生する、硬いアスファルトの固まりをピックで崩していく「削り（はつり）作業」を行う時は、顔も体も全身真っ黒になり、髪の毛がパサッ



いてしまうことも。また、外へ出て作業することも多々ありますから、夏は汗だくになり、日にも焼けます。そのため、この仕事を始めた当初は、「本当に大丈夫なの？」と何度も聞かれました。それでも頑張ろうと思えたのは、女性でもできることを証明したいという強い想いです。だからこそ、新入社員の頃は無我夢中で仕事に打ち込んでいました。色々な先輩方の後ろについてまわり、「これは何ですか？」と質問をしたり、一緒に汚れながら修理をしたり。重いものを持つこともあれば、高いところに登ったりもしました。こうした努力の末、先輩が業者の方に対して、「最初はどうかと思っただけ、栗原さんがいてくれて本当に助かっているんだ。」この子はすごいよ。」と話している姿を見た時には本当に嬉しかったですね。あの瞬間は、一生忘れられません。

SESSION-04  
誰もが働きやすい環境をこの手で

今後は、機械の知識や整備の技術を磨くとともに、出荷時の温



度調整の精度を高めていきたいと考えています。そして、女性でもできるということを、学生のみなさんにも伝えたいですし、女性の後輩にも入社してもらえたら嬉しいです。大変なことも多々ありますが、機械職の仕事は本当に楽しいですし、頑張れば頑張るほど、自分のことが誇らしくなると思います。また、働きやすい職場づくりにも力を入れていきたいと考えています。栗橋合材製造所には年の離れた先輩方が多く、私はまだまだ若手社員の一人。だからこそ、様々な場面で頼っていただけのことも多く、現在は出勤予定の調整なども行っています。特に、この仕事はお客様の現場の稼働状況に合わせなければならぬので、夜間勤務や土曜出勤などが発生してしまうこともあります。そうした中でも迅速な代休取得や、しっかりと休める日を確保することで、各メンバーに負担をかけない体制を強化していきたいですね。そして、何よりも安全第一に仕事に取り組める環境に貢献していきたいと思っています。



栗原 夏樹  
Profile

鹿島道路には2021年に中途で入社。前職は鹿島道路の下請け企業に所属し、現在と同じ栗橋合材製造所にて、重機やプラントのオペレーターとして業務に携わる。鹿島道路に入社後は、頼れる若手として活躍の場をさらに広げながら、日々アスファルト混合物の製造に尽力している。





あらゆる

プロジェクトを自ら動かし、

統率者として

ゴールへ導いていく。

東京支店東京中央営業所 工事部 主任  
2012年入社

為口 直輝

Naoki Tameguchi

### SESSION-01 プロジェクト全体を 俯瞰し、計画通りに 推し進める

所属する工事部において、私は主に道路の施工を担当しています。

人々の安全を守ります。作業員さんはもちろん、現場によっては一般の方々も通行されますから、すべての方に危険が及ばないように徹底しています。また、労働安全衛生規則などの法律が遵守されているかの確認も大事な仕事の一つです。次に、「品質」では、舗装した道路の品質をチェックします。特に、地盤を固めるためには路盤材をローラーで転圧するのですが、不備があると割れたり、たわんでしまったりするため、工程ごとに問題が生じてないかを確認しています。そして、その最終的な確認作業を「出来形」と言います。最後に、「工程」「原価」は、それぞれスケジュールと費用の管理です。お客様から工事完了の希望日をお伺いして、そこから逆算して計画立案し、人件費・材料費・機材費などを考慮した上で利益を確保していきます。この一連の流れすべてが現場監督の責任となるため緊張感がありますが、一方で、この仕事のおもしろさでもあると感じています。

携わるプロジェクトの規模は、3年や5年といった長期間のものから、数カ月や1日で終わる短いものまで様々です。ダムや橋梁、大きなビルの建設などと比べると、道路工事は短期間のものが多いかもしれません。

中でも、私は入社してからこれまで現場監督業務に携わっています。私たちが管理しているものは大きく5つで、「安全」「品質」「出来形(できがた)」「工程」「原価」です。まず「安全」では、現場と法律、二つの観点から



### SESSION-02 どんなに忙しくても、 安全第一での作業を意識

品質を担保することはもちろん、私たちの最大の使命は、現場の安全を守ることです。どの現場においても重機は必ず使用します。ので、何かあれば事故につながりかねません。そのため、どんなに忙しくても、書類の確認や法律の遵守など、当たり前前のことを必ず守るように意識しています。例えば、現場には「区画整理」と呼ばれる重機が稼働する範囲をバリケードやカラーコーンで囲うルールがあるので、ですが、作業を優先していると乱れてしまうことがあるんですね。こうした乱れを指摘し、現場の作業員さんに守ってもらうことで、事故のない安全な作業につながると実感しています。

また、安全を守るためには、工事の内容をお客様にしっかりとご理解いただくことも欠かせません。お客様は工事に詳しい訳ではないので、時には厳しいスケ

ジュールや作業エリアの縮小などを相談されることもありますが、そんな時こそ、私たちの出番です。現場監督がお客様とコミュニケーションを積極的にとり、なぜそれが必要なのかを安全の観点から説明する。結果、場合によっては譲歩いただくことで、現場の安全が守られると考えています。

### SESSION-03 円滑な現場作業のための 調整役

この仕事で最も大変なのは、周囲との調整業務です。特に、プロジェクトが大きければ大きいほど、その大変さは顕著に表れます。例えば、大きなビルの外構工事や外周道路工事の場合、電気工事業者、ガス工事業者、さらには植栽業者など、関係者が多岐にわたるんですね。こうした業者の方々も、私たちと同様に納期までに工事を終わらせなければなりません。そのため、工事日





程が被ることのないよう、いつ、誰が、どの場所の工事を行うかを調整していきます。また、プロジェクトによっては警察など官庁の許可申請の手続きや、交通量を考慮した時間制限も発生します。こうした様々な制約がある中でも、安全かつスケジュール通りには完遂させることが、私たち現場監督の役割なのです。

また、調整をする中で大切にしているのは、他者とのバランスをとることです。他の業者の方々の意向を汲み取ることはもちろんですが、相手ばかりを気にしすぎると自分たちの工事が進みません。ですので、その塩梅を見ながら、持ちつ持たれつでの業務を心がけています。

SESSION-04  
期待を超える施工から、信頼関係が生まれる

お客様が期待される以上の製品をご提供する。この意識が、お客

様との長いお付き合いを実現すると信じています。期待以上の製品とは、見た目の美しさはもちろん、長くお使いいただけるような施工のこと。例えば、現在携わっている駐車場のプロジェクトであれば、「運転しやすいように段差をつくらない」、「トラックなどの重量車の出入りが多くても傷みにくい」などです。こうした高品質かつ壊れないものづくりは、結果としてお客様の利益も生み出しますし、私たちの次の仕事にもつながると考えています。



大学時代は土木工学科に所属。力学全般について学ぶとともに、建築技術を用いた魚道の設計などの「水利権」を研究していた。将来は大学で培った知識を活かしたいと考え、ゼネコンを中心に採用説明会へ参加。中でも、若手でも責任のある仕事を任せてもらえる鹿島道路の環境に惹かれ、入社を決めた。



為口 直輝  
Profile



## 専門知識を結集し、 考え抜いた先で生まれた、 社会インフラに貢献する建築物。

## INTRODUCTION

道路の舗装に留まらず、土木・建築や、アスファルト混合物の製造・販売、さらには建設機械の開発など幅広い事業を展開している鹿島道路。中でも工事部建築課は、建物の施工管理を担い、安全や品質などの管理に努めている。ある時、建具メーカー様をクライアントとする「建具の遮音性能試験を行うための試験棟」の建設プロジェクトが発足。現場の監理技術者として任命された杉本は、特殊な建築構造に対する課題を協力会社の方々とともに解決し、本プロジェクトを成功へと導いたのだった。



関東支店工事部建築課  
2018年入社

杉本 康平 Kohei Sugimoto

### SESSION-01 任されたのは、 見たことのない 特殊な構造の建築物

前職では高層ビルの改修工事を行っていた杉本。建築物の基本構造を一から組み立てていく躯体工事や外構工事、さらには道路工事などにも携わりたいと考え鹿島道路へと入社した。現在は工事部建築課に所属し、監理技術者として建物の施工管理に携わる。そんな杉本の元に舞い込んだプロジェクトが、「建具の性能試験を行うための、遮音・電磁波試験棟の新築工事」だった。鹿島道路は、協力会社となる音響設備会社様からの一次下請として建築工事一式を請け負い、そこで杉本は、監理技術者として現場監督業務を担うこと

なった。「このプロジェクトの最大の特徴は、”遮音試験が行われる建物“であることでした。それゆえ、構造はコンクリート造であることや、仕上げの左官工事で使用する材料にも制限があることに加え、反射角や入射角といった音の反響を意識した角度での建築が求められました。」と杉本は話した。



### SESSION-02 専門的な施工方法は、 迷わず周りに相談を

左官工事とは、主にコテを使いながら、最後の仕上げとして壁や床に材料を塗り上げていく工事のこと。材料の種類は、大きく「セメント系」と「石こう系」の二種類がある中、今回使用されたのは、遮音性への配慮から「セメント系」の材料だ。こうした材料の選定は、ポイントの一つであったと杉本は語る。「セメント系と一括りにしても種類は様々で、用途によって使用する材料は異なります。音響設備に詳しい元請け会社さんの情報をもと

に材料を検討した上で、左官工事業者さんと相談しつつ決定していきました。基礎知識はもちろん持っていなければなりません。こうした現場では、専門分野とされている方々の知恵をお借りすることも非常に大切です。」

一方、要となったのは、図面に記載された角度を厳守しての建築だ。「建築予定の建物は、平面図で見ると五角形になっていて、屋根も傾斜していました。その角度は、反射角・入射角が綿密に計算されたもので、この建物の肝となる部分。だからこそ、測量を専門分野とする墨出し業者さんや、実際に工事を行う大工さんとの確認・連携を心がけた上で施工の指示を出していました。」

### SESSION-03 あらゆる手段を検討し、 困難を乗り越えて

プロジェクトを進めていく最中、杉本の前に壁が立ち上がった。それは、「階高6mの建物を、既存の建物内に建築する」という特殊な状況に起因する。



大変だったのは、コンクリートの打設方法だと杉本は話した。「既存の屋根との間が狭くて通常のポンプ車を入れることができず、コンクリートが高い地点から重力で落下してしまう状況がありました。しかし、それではコンクリートの成分が落下中に分離してしまい、不完全な建物になってしまう。そこで、分離を防ぐための専用ホースや、コンクリートの打設中に壁を振動させる壁パイプの使用を検討。結果、コンクリートの品質保持に成功しました。」

また、この遮音・電磁波試験棟は、隣接して二棟立てる必要がある、そこで問題になったのが建物同士の間隔の狭さだ。壁同士の隙間がわずか110mmという狭さの中、どうコンクリートを打設すべきかも苦労したと語る杉本。「本来であれば、パイプとベニヤ板を使って、型枠をつくるのですが、110mmの隙間では難しい。そこで、都内などでよく見られる狭小地におけるマンシヨンの建設方法を活用したんです。隣接金物と呼ばれる特殊な金物を用いることで、無事にコンクリートを打設することができました。」



#### SESSION-04 建築を通じて、 暮らしを支えていく

これまでの現場においての杉本は、所長や副所長など複数人のメンバーがいる中で一人だった。しかし、本プロジェクトで鹿島道路から参画したのは杉本のみ。施工管理を0から100まで自らの手で行う必要があったからこそ、全体の流れを自分のモノにすることができた実感している。「あらゆる工程の細部まで突き詰めて考えられたことは、私の大きな糧となりました。この経験は、今後どのようなプロジェクトにおいても活かせると考えています。」と、杉本は話

した。また、本プロジェクトは、建具メーカー様の遮音・電磁波試験の向上を通じて、社会インフラにも貢献できているのではないかと語る。「人が住まう家を建築する中で、建具はなくてはならないものです。人々の暮らしを支えるものだからこそ、建築から建具の性能向上に携われたことを誇りに思います。」非常に特殊な建築工事となった本プロジェクト。杉本のみならず、鹿島道路の成功事例として刻まれた知識やノウハウは、この先、数多くのプロジェクトに活かされていくことだろう。そして、大規模な現場の所長を目指すと言った杉本の挑戦は、これからも続いていく。



## 建設機械の改修からはじまった、 「安全」に対する 本質的な意識改革。

### INTRODUCTION

道路や橋梁、空港、ダムといった社会インフラを支える舗装から、倉庫や工場、学校、オフィスビル、商業ビルなどの建築まで、総合的な技術力で暮らしを支える鹿島道路。その一つひとつの現場で“安全第一”が叫ばれる中、建設機械の改修によって人を守りたいという想いからスタートしたのが、「ブレーキアシストシステムプロジェクト」だ。  
このシステムが搭載された建設機械は全国に展開され、今日も現場の安全に寄与している。



## 伊藤 圭祐 Keisuke Ito

技術開発本部 機械部 開発設計課 機械主任  
2012年入社

### SESSION-01 人々の安全を守る 機械の開発を目指して

機械部開発設計課に所属し、建設機械を開発している伊藤は、入社後の研修で実際の道路舗装に携わる中で、安全に作業を進めることの重要性を感じていた。また、全国の各現場からも事故防止に関する議題が浮上していたこともあり、全社的に対策を講じることが喫緊の課題となっていた。「建設現場は、業務の特性上、どうしても建設機械や作業員が密集しているんです。すると、機械と人が接触し、事故が発生してしまふ。この状況を打破するためには、建設機械に人やモノを検知させて自動ブレーキ操作を行わせるシステムや、警報を鳴らすシステムを開発する必要があると感じていました。そこで、開発設計課のメンバーとともに、このブレーキ



アシストシステムの製作に取りかかることになったんです。」と伊藤は語る。

中でも、主に伊藤が担当したのは、建設機械に取り付けるAIカメラやミリ波レーダーなどの選定だ。「AIカメラは”人の形をしたもの”といった条件で検知する一方、ミリ波レーダーは前面にレーザーを放射していることから、レーザーに触れたものすべてを検知します。また、AIカメラは暗いところを検知できないため夜間工事には向かなかったり、ミリ波レーダーは必要のないものまで検知してしまったりというメリットデメリットがありました。これらをもとにした検証作業には、非常に苦労したことを覚えています。」と伊藤は話した。

### SESSION-02 「安全性」と「生産性」を 両立させるために

本プロジェクトの最大の課題は、確実なブレーキの動作で安全を担保すると同時に、作業効率を低下させないこと。つまり、安全性と生産性のバランスをど

うとるかにあったと伊藤は語る。「安全を重視し、対象物を遠距離から検知させると、機械が頻繁に止まってしまうので作業が進まない。一方、近距離から検知させすぎると急ブレーキがかかり、作業員の安全が脅かされたり、固まりはじめている路盤をえぐってしまったります。そこで行ったのが、過去の開発で培ってきたノウハウの洗い出しと、先輩社員や協力業者の方々との協議をもとにした検証の繰り返しです。また、ある程度自分たちの検証を終えた後には現場にも機械を持ち込み、実際に利用してもらうことで、より利便性の高い機械へと改修していききました。」こうして、どんな現場にも対応しうるシステムが生じたのだった。

### SESSION-03 現場の誰もが使える、 「シンプルなお操作性」

第一弾としてシステムが搭載された建設機械は、道路舗装の現場において用いられるローダーローラーだ。こうした機械は、現



場にいる作業員なら社内外問わず誰もが使う可能性がある。そのため、操作性がシンプルであることは重要なポイントであった。「このシステムを利用するのは、現場の作業員の方々。だからこそ、何も知らない人であってもすぐに理解できて使いこなせることが必須条件でした。そのため、動作スイッチはシンプルに二つのみ。一つは電源を入れるもの。もう一つはブレーキを動作させるものです。また、一つの電源スイッチのみ入力されている場合は、危険が迫っていると警報を鳴らす仕組みになっています。こうした警報だけで使用するパターンと、実際にブレーキまで稼働させるパターンがあることは理解していました。これは、現場の声もそうですが、入社時の現場研修の経験も活きていると思います。」と語った伊藤。しかし、ブレーキアシストシステムが搭載されているからといって、安全が100%守られる訳ではない。「アシストには、システムを過信してはならない」という注意喚起の意味も込められているという。



SESSION-04  
社内外に広がる、  
鹿島道路の  
安全への取り組み

ブレーキアシストシステムは、鹿島道路の全国の現場の建設機械へと瞬く間に展開された。「全国的に見て、労働災害は減っていると思いますね。システムの効果によって、接触事故にならずにヒヤリハットで済んだといった声も現場から上がってきています。さらに、このシステムの利便性の高さについて現場の方から評価いただけたことで、役に立てたのだと改めて実感しました。」と伊藤は話す。また、このシステムで生まれた技術は、社外にも公開されると

ともに、第二弾、第三弾と別の建設機械への活用も進められている。そして、本プロジェクトの大きな功績は、安全に対する現場意識のさらなる向上だ。「このシステムを取り付けてほしいといった現場からの声は、とても増えています。積極的にそう言っていただけるのは大変喜ばしいことですし、現場の安全への意識向上を感じました。加えて、私たちの技術を公開することで、鹿島道路の安全への取り組みを業界全体に浸透させることができたのではないかと考えています。」と語る伊藤。現場の安全だけでなく、人の意識までも変化させたブレーキアシストシステムは、これからも鹿島道路の新しい未来を切り拓いていく。

